#110

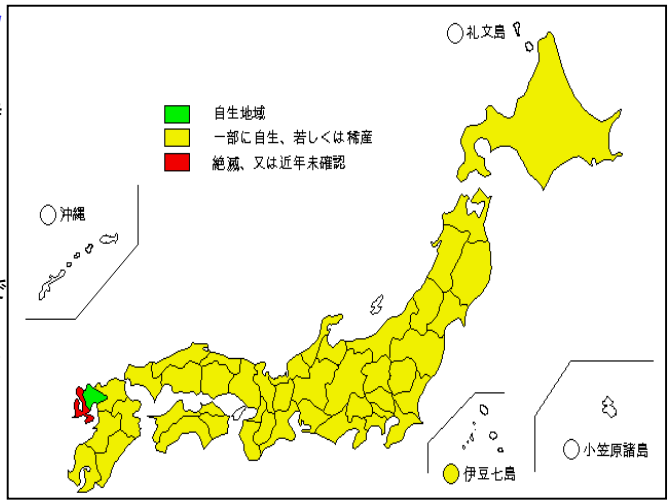
クマガイソウ

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

Cypripedium japonicum

クマガイソウ(愛知県奥三河　09.5/4)

全国の薄暗い樹林下に自生する大型の蘭です。アツモリソウ属の中では最も大型で30～50cmほどの高さに成長し、本州中部地方では4月中旬～5月中旬に2枚展開した大きな扇状の葉の中央から子供の拳程もあるアツモリソウ属特有の袋状の花を咲かせます。花色は変化に乏しいですが、一般的に素芯と呼ばれる緑化花が稀に確認されます。空気中の湿度と風通し、水捌けのよさを好み、渓流沿いの大きな岩(瓦礫)が点在する斜面の痩せた杉林や竹林などで、ヤマアジサイやマタタビなどの小型樹木に混じり自生します。。冬場は地上部が枯死し越冬します。地下茎が1年で20～50cmも伸び地下で網目状に展開し増殖することから大抵の自生地では大群落になることが多いです。但し自生地は極めて限られており、あるところには大群落があり、その他の場所には全くない、というように自生域がはっきりとしています。寒冷地性の種が多いアツモリソウ属の中で、低地に自生するものはこのクマガイソウとコアツモリソウのみです。



全国の薄暗い樹林下に自生します。

クマガイソウの群落(愛知県奥三河　09.5/4)

昔は近所の裏山などでも普通に見られた蘭ですが、この特有の大きな花やラン科の中でもさらに人気の高いアツモリソウ属であるということ、また草丈も大型で発見しやすい、もともと人里近くに自生域があり人の生活圏と重なる、などの理由からアツモリソウやエビネ、ウチョウラン、セッコク、フウラン並みの徹底的な盗掘対象となり、今では保護区以外ではまず出会うことができなくなってしまいました。販売目的の大規模盗掘が自生量に甚大な被害を与えたのは悲しい事実ですが、人間の生活圏拡大による開発の犠牲も少なくはなく、大型で非常に強健、さらには増殖率も高い蘭であるにもかかわらず全国で危機的状態に陥っております。株繁殖に頼っている傾向にあり限られた場所にまとめて生えているため、心無い人間に見つかったが最後、すぐにその自生地では絶滅してしまう危険性が高いです。一説によると、稀に確認される実生苗は、発芽から開花まで10年以上かかるといわれております。

Document and photo by LittleFlower 2009

僅かですが商用生産もされているため入手は可能です。但し、未だに堂々と盗掘品を売っている業者も多いですし、ドライブインなどで売られているケースもあります。昔から地植えで栽培されている方も多いので（特に林業をやられていた方のご自宅など）、栽培品を譲り受けるのが最良でしょう。 栽培は容易ですが、地下茎が非常に長く伸びるので鉢栽培はやめてください。（地下茎を短く切ると株が極端に弱ります） 庭に落ち葉の積もる湿った場所があればそのまま地植えにしても結構です。杉林を持っておられるなら、そこに植えておくのも理想的です。増やすには株分けしかありません。適した環境を作ってやって自然に群落になるのを待つのが一番でしょう。 ちなみにシーズンになると店頭に並ぶ台湾クマガイソウ（ただのクマガイソウとしてポットで売られていることもある）は地下茎が短く鉢やプランターでも育てやすいです。台湾クマガイソウは花色が結構薄いことで本種と見分けがつきます。

クマガイソウ（愛知県奥三河　09.5/4）

クマガイソウ（愛知県奥三河　09.5/4）

クマガイソウと同じCypripedium属で一番有名なのは寒冷地に生えるアツモリソウです。アツモリソウよりも色が濃く花が大きいホテイアツモリソウ、その中でもさらに濃紅色で重宝される釜無ホテイアツモリソウと呼ばれています。また、北海道礼文島固有のレブンアツモリソウ、北海道の一部に稀産するカラフトアツモリソウなどがあります。 そのほかに高山性で面長のキバナノアツモリソウ、その変種で赤花の大陸由来種と思われるチョウセンキバナノアツモリソウ（エゾノクマガイソウ）、クマガイソウと同じ低山帯に自生する10cmほどのコアツモリソウがあります。また、茨城県で確認された花茎に毛がない変種をヒタチクマガイソウとよび区別しています。

クマガイソウ（愛知県奥三河　09.5/4）

クマガイソウ（愛知県奥三河　09.5/4）

Document and photo by LittleFlower 2009